

自然誌 だより

Natural history

秋

三重自然誌の会情報誌 110 号

2016年 12月

大敷網で混獲されるハリダシエビス

小学生の頃の私は、魚釣りにあけくれる毎日で、学校が終わると宿題もせずに竹竿をかついで海に行っていたので、父の友人から「槌柄の浦島太郎」と呼ばれたこともあります。当時は、食べることができる魚を釣るというより、いろいろな魚を釣ることが楽しく、日暮れまで粘って釣ったカゴカキダイ、何度も糸を切られながらつり上げたウツボは、今でも忘れられません。

さて、発光器を持つ魚は深海に生息するものと思っていましたが、本年8月4日と8日に南伊勢町の大敷網漁、いわゆる大型定置網漁にかかったものを入手することができましたので報告します。

魚の液浸標本を自宅で管理することはハードルが高いので、まずは魚拓に挑戦することにしました。手始めに刺網にかかる魚を獲ようと漁港に出向くも、今年の夏は天候不順でなかなか魚にありつけませんでした。南伊勢町奈屋浦で漁師をする橋本浩明さんは、私の同級生で、大敷網に携わっています。そこで彼に鱗がはっきりした魚をとっておいてもらうよう依頼しました。夏は主にアジやイワシを対象としているため、大きな魚は入らないとのことでしたが、「小型のシマイサキ、ネンブツダイに混じってザラザラした変わった魚があったので入れておいたよ。」といって魚を渡されました。その魚は、ハリダシエビス *Aulotrachichthys prosthemi* (Jordan & Fowler, 1903) でした(写真)。鰭は橙赤色で美しく、鰭と同じ色の小さな鱗が多数あります。大きな目をもち腹部に発光器がある魚なので、深海に棲む種類だと思いました。三重県においては、1981年発行の三重県立博物館研究報告に尾鷲、熊野灘、1997年発行の三重の海産魚類には熊野灘で記録されています。いずれも深度等の記述はありませんが、本種は水深が浅い場所にも生息するものと思います。



写真 ハリダシエビス (2016年8月8日, 南伊勢町奈屋浦)

〈中野 環：度会町大野木1711-1〉

ヤマセミ，カワガラス，キセキレイのねぐら

清水善吉

これまでも吐露したことがあるかも知れませんが，私には「夜の川歩き」という少しだけ変わった趣味があります．おもなターゲットはオオサンショウウオなのですが，それ以外にもいろいろな生きものに遭遇します．ハクビシンについてはすでに本誌108号で報告しましたが，今回は鳥，それも夜のことで睡眠中の鳥たちの姿を写真で紹介します．

ヤマセミ

本種は見目麗しいため写真の被写体として人気があります．繁殖やハンティングなど，いろいろな場面の写真をみますが，寝姿の写真は未見です．その姿がとくにセクシーというわけではなく，枝にとまっているだけですが，たぶん世界初ではないかと思います．

写真1は2016年8月25日午後9時9分に伊賀市伊勢路の青山川で撮影したものです．水面に張り出した広葉樹の枝の，地上から3mほどの高さのところに単独で留まっていました．近寄っても飛び立とうとはせず，枝の真下まで近寄ることができました(写真2)．目撃地点は川幅7～8m，水深は深いところでも50cmほどの溪流です．

ヤマセミは前述の三日後の8月28日にも名張市安部田の阿清水川で遭遇しました．午後9時55分に，やはり水面上に張り出した木の枝，高さ3～4m程のところに留まっている1羽を発見しました．「逃げない」と三日前にインプットされていたので無造作に近づいていくと数mのところで跳び去ってしまいました．川の遡上を続けると2～3分後に再び枝に留まっていたましたが，これもすぐに跳び去りました．さすがに二度逃げられると私も再学習し，今度出会ったら速攻で写真を撮ろうと決意していたところ2～3分後に再々度発見，飛び立つ姿をкаろうじてカメラに納めました(写真3)．この川幅と水深は青山川のとときと同じくらいでした．

この三度にわたる目撃は，状況からみてすべて同一個体であったと思われます．最初の発見から3度目までの時間経過は約5分，飛翔距離は数十mで，遠くへ一気に跳び去ってしまうことはありませんでしたので，やはり夜間飛行は苦手なようです．川歩きを続けましたが，4度目の遭遇はありませんでした．私はいつも同じいでたちで川を



写真1 睡眠中のヤマセミ（伊賀市伊勢路，2016年8月25日）



写真2 1mほどに近寄っても逃げない（伊賀市伊勢路，2016年8月25日）



写真3 闇の中に跳び去るヤマセミ（名張市安部田，2016年8月28日）

歩いていますので、睡眠中のアクシデントにより留まるか跳び去るのかは個体の性質によるのでしょう。カワガラス

少し前のことで、また三重県内での記録ではないのですが、2012年8月30日午後9時22分に奈良県曽爾村伊賀見の布引川で1羽を目撃しました。目撃地点は、川幅2m前後で小滝が連続するような溪流で、カワガラスは高さ3mほどの滝の、流下する水の裏側の棚で休んでいました（写真4）。1mほどまで近づきましたが、跳び去ることはありませんでした。

キセキレイ

2015年9月2日午後9時33分に伊賀市上阿波の子延川で、地上高2mほどの水面に張り出した広葉樹の枝に2羽が、30cmほど離れて留まっていました。川幅4m、水深30cmほどの溪流で、1.5mほど上流に小滝があるため、枝にもわずかに水飛沫がかかっていた。前後左右1mほどに近づいて写真をとりましたが、跳び去ることはありませんでした。

ヤマセミ、カワガラス、キセキレイの夜間休息中の目撃事例を紹介しましたが、いずれも水辺や水中で餌をとっている鳥ですので、生活圏のなかでねぐらをとっているとみられます。ところで、夜の川歩きはオオサンショウウオ調査が目的ですので下を向いて歩くのが基本です。実際には、鳥たちが眠っている下を気づかずに通り過ぎていることも多いことでしょう。四つの目があればと切に思います。

〈しみず ぜんきち：松阪市日丘町1386-17〉



写真4 睡眠中のカワセミ（曽爾村伊賀見，2012年8月30日）



写真5 睡眠中のキセキレイ（伊賀市上阿波，2015年9月2日）

マイマイカブリ、熟イチジクを食す

マイマイカブリは、オサムシの仲間ですが、名前のとおりカタツムリ食するとき殻のなかに口を突っ込みやすいように細長い頭と首？をしています。これだけ体型が特殊化しているのだから、カタツムリ専門食かと思っていましたが、熟したイチジクをむさぼり食べているのを観察したので記録しておきます。

2016年10月15日午後4時6分に、松阪市柚原町の別宅に植えているイチジクの実を食べていました（写真）。この実は人が食すには熟し過ぎの状態、観察時には一心不乱に食べていましたが、写真を数枚とった時点で自ら2mほど下に落下して逃げていきました。Webで本種を検索してウィキペディアを見ると「落下果実や樹液も摂食する」とありましたが、今回の場合は木に登って食べていました。



写真 木に登ってイチジクを食べるマイマイカブリ
〈清水善吉：松阪市日丘町1386-17〉

ハッチョウトンボの赤化過程について

浅 名 正 昌

ハッチョウトンボの羽化したての未熟個体は白色をしているが、オスは成長と共にその体色を赤色に激変させる（写真-1, 2）。しかし、成熟個体に至る過程での体色変化に関する報告はない。今回、野外観察を実施したところ、本種の赤化過程の規則性について若干の知見を得ることができたので報告する。

調査場所及び期間・方法は、伊賀市下友生の三重県上野森林公園内で2013～2015年の5～8月にかけて、主として午前中に赤化過程の異なるオス個体を数多く写真撮影し、その写真を腹部各節の側面に現れている赤色を発現順に整理することで赤化の過程を調べた。

本種が赤化する過程は以下の通りであった（写真中①～⑬は赤化する順番を示している）。

羽化直後の未熟個体は白色をしていたが（写真-1）、成長と共に各腹節の麦わら色が濃さを増し、部分的に茶色へと変化して赤化していった。赤色が最初に現れる腹節は、第4節側面の後ろ側5節寄りの茶色部で（写真-3、①）、ついで第5・6・7腹節の順に茶色部が赤化した（写真-4、②～④）。第7腹節の発色あたりからは腹節部の前側側寄りにも発色している個体が多く見られ、赤色が腹節の後ろ側寄りにのみ現れている個体は探せなくなった。これは、撮影月の変化による日照時間の変化や気温の上昇、羽化時間の早まりなどが影響しあって、生育速度が速まったことによるものと思われるが定かではない。

以降の発色順は翅胸寄りの腹節と付属器寄りの腹節との交互になった。すなわち、赤化⑤番は第3腹節の後ろ側4節寄りの(a)で（写真-5）、⑥番は第8腹節（写真-6）、⑦番は第3腹節の中央の(b)、⑧番は第9腹節であった。なお、8番目あたりから各腹節の赤色は各腹節の腹部背面へと広がっていった。また、この時期には翅胸前面に赤色斑が現れ翅胸部の赤化が始まった。赤化⑨番は第2腹節後ろ側3節寄りの(a)、⑩番は第3腹節の前側2節寄りの(c)、⑪番は第2腹節の前側1節寄りの(b)で、この頃になると各腹節の赤色は第2節、第3節を除き背面まで広がり、⑫番は第10腹節であった（写真-7）。

この段階で第2、第3腹節の赤色も腹部背面へ広がりを見せていたが、腹部側面全体は未だ赤化していなかった。最後の赤化は付属器であり（写真-8、⑬）、付属器の赤化と共に最後まで残っていた第2、第3側面の赤化も終わり、赤化が完結した（写真-2）。なお、第1腹節は羽化後に灰色を濃くして黒色化するが赤化はしなかった。

今回の観察により、ハッチョウトンボの赤化過程について次のことが明らかになった。

- 1) 赤色の発現は、未熟個体の腹節側面ごとに見られる茶色部分の後ろ側寄りから赤色の発現が始まり、最初に赤化が始まるのは第4腹節である。
- 2) 腹節の後ろ側に発現した赤色は時間経過と共に前側側へ濃く伸びた茶色部を染めていく。
- 3) 5番目から12番目への発色順は、翅胸寄りの腹節と付属器寄りの腹節との交互である。
- 4) 時間経過と共に各腹節の赤色は、腹部背面に現れている茶色部を、腹部第9節背面から順次翅胸側へ赤く染めていく。
- 5) 腹節最後の赤色発現は腹節ではなく付属器である。
- 6) 腹節側面を最後に染め終わるのは第2・3腹節であるが、染め方には個体差が見られる。
- 7) 各腹節への発色順をまとめると、①第4腹節→②第5腹節→③第6腹節→④第7腹節→⑤第3腹節の(a)→⑥第8腹節→⑦第3腹節の中央(b)→⑧第9腹節→⑨第2腹節の(a)→⑩第3腹節の(c)→⑪第2腹節の(b)→⑫第10腹節→⑬付属器で赤化は完了する。

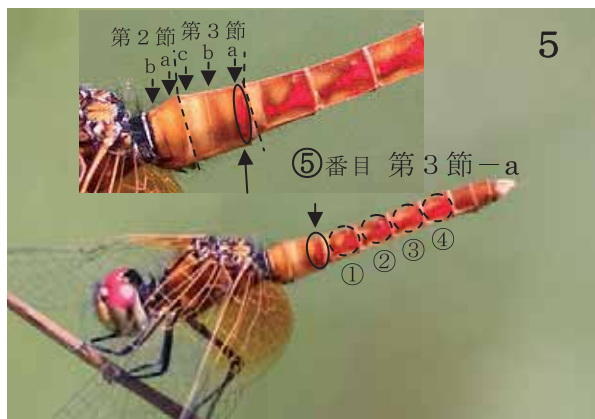


写真-1～8 ハッチョウトンボ（オス）の赤化過程（詳細は本文参照）

〈あさな まさよし：伊賀市緑ヶ丘西町2424-11〉

大台ヶ原尾鷲辻のシントウトガリネズミ

清水 善 吉

シントウトガリネズミ（以下、トガリとする）は寒冷期の生き残り種で、北海道では平地にも生息しますが、本州・四国などでは亜高山帯以上にしか分布しません。三重県では大台ヶ原にのみ生息していましたが、最新情報は1988年で過去30年近く記録がありませんので、当山系からは絶滅したのではないかと考えられます。

さて、この1988年の記録ですが、三重県立博物館の資料目録自然科学No.3のなかに「(001) 多気郡宮川村大台ヶ原尾鷲辻付近（液漬） 1988.10.4 山下善平」と記載されています。この液漬標本は、大台ヶ原からは全身がそろったおそらく唯一の（他は頭骨のみ3個体を筆者保管）、そして最後の標本になると思われますのできわめて重要です。しかしながら、産地である大台ヶ原尾鷲辻は、名称が紛らわしいためかよく間違われますが、三重県ではなく奈良県に属しています。この標本の産地データは「奈良県吉野郡上北山村小椋大台ヶ原尾鷲辻」とするのが正しいと思いますが、三重に住む者として、大台ヶ原におけるトガリの最後の標本が奈良県産であることは少し悔しい気もしますので、三重県尾鷲辻の可能性について少し検討してみたいと思います。

採集者である山下善平さんは三重大学農学部の昆虫学研究室の先生で、1995年に亡くなりました。先生の生前には私もご指導をいただいております。筆まめな方でしたのでトガリ採集時にもお知らせのお手紙をいただき、写真3枚が同封されておりました。2枚はトガリ死体（図1-a）、1枚は死体発見付近の植生でした（図1-b）。また、3枚とも場所・日時が裏書きされており、「尾鷲辻（海拔1580m）1988-10-4」とされておりましたので、産地が尾鷲辻であることは間違いありません。

図1に尾鷲辻周辺の地図を示しましたが、辻自体は完全に奈良県側です。また、辻の海拔は1580mであり、先生の記録と一致します。三重県側で同海拔の地点は図1の赤楕円付近になりますが、先生は1915年生まれですので、このときすでに70歳を超えており、いくら達者であったとはいえ道のない山中を歩いて体長数cmのトガリを発見するのは困難であったと思われます。また、発見付近の写真の位置を確かめるために、現地で尾鷲辻を起点にして東西南北の写真をとってみると、南東方向（図1茶色→）の写真とほぼ一致しました（図1-c）。残念ながら、大台ヶ原最後のトガリはやはり奈良県産のようです。



図1 大台ヶ原尾鷲辻付近の地図とトガリ死体発見付近の植生（a, b；1988年10月4日山下善平撮影，c；2014年11月27日筆者撮影）国土地理院地形図使用。

〈清水善吉：松阪市日丘町 1386 - 17〉

「シラタマホシクサ 1 m²運動」に参加しませんか

シラタマホシクサは東海地方の丘陵地だけに生育する希少植物で、三重県レッドデータブックでは絶滅危惧ⅠB類、国は絶滅危惧Ⅱ類に選定しています。本誌上でも何度か紹介した鈴鹿青少年の森公園内の湿地には県内最大規模の群落があり、秋の花の時期には湿地一面が白波の立ったようにみえます(写真1)。この生育地も、ご多分にもれず過去には消滅の危機もありましたし(本誌87号)、放置すれば遷移が進行しますので年1回の草刈りは欠かせません。また、現状維持にとどまらず、いずこかの国の首相が提唱する積極的平和主義にならって、積極的保全活動を行っています。具体的には、湿地植物の発芽を阻害するヌマガヤやイヌツゲ、コシダなどを除去し、湿地面積を拡大していくことです(本誌107号)。

その作業の一環として、昨年の(2015年)冬にヌマガヤ原をスコップで起こしたところ、秋にはシラタマホシクサの発芽が多くみられましたので、気をよくして今年は重機を用いて表土はがしを行いました(写真2)。その後のモニタリングは、三重大学教育学部生物学研究室の平山大輔先生(本会会員)が学生の梅村昌宏君と一緒に植生調査をしており(写真3)、その結果の一部を聞かせてもらいました。それによると、重機による表土はがし箇所については一定の効果が認められ、表土をはがなかった箇所よりもシラタマホシクサをはじめとする湿地植物の発芽がみられたものの、ふたたびヌマガヤがはびこっているところが多いようです(写真4)。表土のはがし方が浅かったのでヌマガヤの根が残っていたのではとのことですが、湿地ですので大型重機は沈んでしまうため入れられず、今年用いた小型重機ではパワー不足です。一昨年に作業をした箇所の経過は良好なようですので、結局は「人力」に落ち着くようです。

しかしながら、スコップでヌマガヤの根を掘り起こすのはけっこうな重労働で、広い面積を計画すると気が滅入ってしまいます。そこで、今年からは一日一人1 m²だけ限定の作業として継続していきたいと思います。この程度でしたら、苦役に感じずにどなた(私)にも参加できそうです。

つきましては、恒例の草刈りとあわせて下の日時に作業を行いますのでご参加下さい。



写真1 湿地一面を彩るシラタマホシクサの花 (2016年9月3日)



写真2 小型重機によるヌマガヤ除去作業(2016年1月24日)



写真3 モニタリング植生調査 (2016年5月14日)



写真4 スコップ(手前)と重機(奥)による表土はがし作業後の経過 (2016年5月14日)

- | | |
|-------|----------------------------------|
| ■ 日 時 | 1月24日(火) 午前10時~12時 ※湿地前広場集合 |
| ■ 持ち物 | 長靴、軍手、あればスコップ、てみなど ※参加希望の方は事務局まで |

〈清水善吉：松阪市日丘町 1386-17〉

Letter & E-mail

☆カヤネズミについて（東員町）

11月1日今年初めて湿地の草刈りを行いました。カヤネズミの巣らしいので、写真を送付させていただきます。宜しくお願い致します。現在カヤ？の刈り込を進めているのですが今回の巣がカヤネズミのものだったら、今後カヤネズミの生息地の管理を考えることになります。（〇）

→カヤネズミの巣で間違いないです。東員町のどこですか？（S）

清水さんもお存じの三段溜です。この場所は放置の方が良いのですか？（〇）

→繁殖期でない冬場に草刈りをすると良いと思います。（S）

草刈りOKですかホットしました。（〇）

〈大谷勝治・清水善吉〉



岡與一先生を偲んで

ある日のこと。

「花ばかり追いかけて、君は”実”には興味がないのか？」と、聞かれました。岡先生との出会いは、今から25年程前の朝熊山での植物観察会です。その後、何度も自生種について尋ねに伺った時のことでした。

岡先生は、黒く艶々した”実”がお好みようで、タンキリマメ、トチ、ナギ、ヌマタマ、ムクロジなどの話を面白おかしく話してくださり、次第にわたくしも”実”にも目を向けるようになりました。実（種子）は、食用や薬用のほか、食用油や灯火用の油に加工されたり、現在も装飾品として利用されています。

実際にさまざまな体験も一緒に行い、当時ご馳走してもらったお料理は、手間隙かけたカヤの実のおつまみとトチの実入りの炊き込みご飯でした。

わたくしは誉めてもらえることを期待して、ムクロジの実で念珠を作りプレゼント。自分用にはネックレス（写真）を作り、披露しました。津市の結城神社産で落下していた物ではなく、ちょうど造園屋さんが入っている時、神社に許可を得て振るい落としてもらい、頂戴したものです。

岡先生には喜んでもらったこともありましたが、厳しい指摘も受け、怒鳴られたこともありましたが、わたくしを娘のように接してくださり、また生涯楽しめる趣味を持たせていただき、本当に感謝しております。

今ごろ天界でも、トレードスタイルの胴乱を下げ、『机上の空論』ではダメ、僕は時間があれば歩いているから」と、植物愛好家さんたちに言っていることでしょう。（麻生晴子）



編集後記

前号の本欄で「著者が固定化してきた」と書いたら常連ライターさんにも逃げられてしまいました。私の古い記録で凌ぎましたが、何か日記を公開するようで恥ずかしい気持ちです。常連さんはもちろん、一見さんにも安心な自然誌だよりですので、お気軽にご投稿ください。次号は3月発行予定です（善）。

自然誌だより110号

発行日 2016年12月20日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail: mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp